

教職課程コアカリキュラムに基づいた総合的な 学習の時間の指導方法に関する研究

楊 川

はじめに

本研究は教職課程コアカリキュラム及び学習指導要領の検討を通して、本学教職課程の新設科目である「総合的な学習の時間の指導法」^①のあり方をデザインすることを試みるものである。

平成10年版（小・中学校）、平成11年版（高等学校）学習指導要領において「総合的な学習の時間」（以下、「総合学習」と略す）が誕生し、各教科、外国語活動（小学校のみ）、道徳（小・中学校のみ）、特別活動とともに、教育課程の一領域となった。しかし、総合学習は誕生の時期から学力低下論に巻き込まれる形で社会からの批判を受け、さらに学校現場からも内容、方法の分かりにくさゆえに批判を浴びていた。

一方、平成28年12月21日の中教審「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」においては、「全国学力・学習状況調査の分析等において、総合的な学習の時間で探究のプロセスを意識した学習活動に取り組んでいる児童・生徒ほど各教科の正答率が高い傾向にあること、探究的な学習活動に取り組んでいる児童生徒の割合が増えていることなどが明らかになっている。また、総合的な学習の時間の役割はPISAにおける好成績につながったことのみならず、学習の姿勢の改善に大きく貢献するものとしてOECDをはじめ国際的に高く評価され

ている」⁽²⁾ことが示され、総合学習はこれまでの批判を乗り越え、教育課程の一領域として生き残り、そして教育課程の中核となる部分として重要視されるようになった。

さらに、平成29年の小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、平成30年の高等学校学習指導要領の総則では、「教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第4章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする」⁽³⁾と、教育課程編成における総合学習の重要性を改めて強調した。

この総合学習の重要性に対し、教員養成を担う教職課程はさらにその質的向上が求められている。例えば、平成27年12月の中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」の教職課程の改革案では、科目区分の大幅な変更がなされるとともに、教育内容として「総合的な学習の時間の指導法」が新規に設定され、教員養成段階において総合学習をより充実すべきことが改革の方向性として示されている。平成29年に「教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令（文部科学省令第41号）」が公示され、教職課程を設置している大学等は再課程認定申請の手続きを経て、平成31年4月1日から新課程に移行することとなっている。新課程では、「総合的な学習の時間の指導法」が新設されるとともに、教職課程の質的水準の担保を目的とする、大学の教職課程を編成するにあたりの参考指針であるコアカリキュラムが設定されており、これに沿った授業設計が求められることとなった。従来の教職課程では「教育課程及び指導法に関する科目」において総合学習の内容が触れられることが予定されていたが、今回のコアカリキュラムのように明記されていなかったこともあり、十分に授業設計、指導方法の研究が進められたとは言い難い。

それでは教員候補者たる学生に対して、教員の基礎的な資質・能力を身に付けさせるため、いかなる「総合的な学習の時間の指導法」が目指されるべきであろうか。筆者はこれまで総合学習の登場した背景、学習指導要領における総合学習の記述の推移、中教審答申において指摘された課題を検討し、教職課程科目としての「総合的な学習の時間の指導法」において求められる指導の原理を考察した⁽⁴⁾。また、中教審答申および学習指導要領の内容の検討を通して、カリキュラム・マネジメントの重要性を確認し、総合学習との関連性を論じた。さらに事例校への調査を通じて、総合学習の位置づけである「体験型学習」に着目し、教科横断的視点で組み立てた総合学習の実態を明らかにした⁽⁵⁾。これらの研究は「総合的な学習の時間の指導法」の授業設計に示唆を与えるものであるが、「総合的な学習の時間の指導法」の全体構成と具体的なデザインをするのに、不十分な点があると言わざるを得ない。特に前述のように、コアカリキュラムの存在を無視することはできず、そこで示されたすべての目標を達成できる「総合的な学習の時間の指導法」を目指さなければならない。

上記課題を踏まえ、本稿では「総合的な学習の時間の指導法」のコアカリキュラムの定めている目標項目に教職課程の履修学生が到達するには、どのような教授・支援が必要なのかを学習指導要領の内容や、先行研究、さらに総合学習の実践事例を提示しつつ検討し、「総合的な学習の時間の指導法」のデザインを試みる。

1. 教職課程コアカリキュラムの作成及び総合学習の内容

教員免許の取得者は教員になるうえで最低限必要な資質・能力を持たなければならないとされているが、学校現場の課題の複雑化・多様化する今日、実践的指導力や課題への対応力などを十分に身に付けないまま初任者になることは、本人はもちろん学校にとっても望ましいことではない。このような点を背景に、教員養成段階による質の確保のため、そして教職課程の質的水準の担保を目的

として、教職課程コアカリキュラムが作られた。これは教育職員免許法及び同施行規則に基づき全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質・能力を示すものである。また、コアカリキュラムの定めている内容を修得させる

表1 「総合的な学習の時間の指導法」のコアカリキュラム

総合的な学習の時間の指導法

全体目標:	総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す。 各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成および具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。
-------	--

*養護教諭及び栄養教諭の教職課程において「道徳、総合的な学習の時間及び特別活動に関する内容」を開設する場合は、(1)(2)を習得し、そこに記載されている一般目標と到達目標に沿ってシラバスを編成する。なお、その場合は学習指導要領の内容を包括的に含むこと。

(1) 総合的な学習の時間の意義と原理

一般目標:	総合的な学習の時間の意義や、各学校において目標及び内容を定める際の考え方を理解する。
到達目標:	<ol style="list-style-type: none"> 1) 総合的な学習の時間の意義と教育課程において果たす役割について、教科を越えて必要となる資質・能力の育成の視点から理解している。 2) 学習指導要領における総合的な学習の時間の目標並びに各学校において目標及び内容を定める際の考え方や留意点を理解している。

(2) 総合的な学習の時間の指導計画の作成

一般目標:	総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける。
到達目標:	<ol style="list-style-type: none"> 1) 各教科等との関連性を図りながら総合的な学習の時間の年間指導計画を作成することの重要性と、その具体的な事例を理解している。 2) 主体的・対話的で深い学びを実現するような、総合的な学習の時間の単元計画を作成することの重要性とその具体的な事例を理解している。

(3) 総合的な学習の時間の指導と評価

一般目標:	総合的な学習の時間の指導と評価の考え方および実践上の留意点を理解する。
到達目標:	<ol style="list-style-type: none"> 1) 探究的な学習の過程及びそれを実現するための具体的な手立てを理解している。 2) 総合的な学習の時間における児童及び生徒の学習状況に関する評価の方法及びその留意点を理解している。

ことだけではなく、「地域や学校現場のニーズに対応した教育内容や、大学の自主性や独自性を発揮した教育内容を修得させる」^⑥ことも求められている。このことから、「総合的な学習の時間の指導法」の授業設計を行う際、コアカリキュラムの内容を網羅したうえで、本学の特性に応じた授業内容の設定や、指導などが求められるといえる。

「総合的な学習の時間の指導法」のコアカリキュラムで示されている教育目標・内容は表1の通りである。

表1^⑦のように、総合学習の特性は横断的・総合的な学習であり、それによって、児童・生徒の課題解決能力、自己の生き方を考える力の育成を目指している。このため、大学が開設する「総合的な学習の時間の指導法」においても、履修学生に総合学習の意義と原理を理解させるうえで、各教科や、道徳、特別活動などで修得した資質・能力を活かした横断的・総合的な学びができるような授業設計が必要である。そのうえで、履修学生が指導計画の作成や、具体的な指導・評価能力を身につけることも求められているといえる。

次項から、表1にある「(1) 総合的な学習の時間の意義と原理」を中心に「一般目標」と二つの「到達目標」に沿って、学習指導要領、先行研究、実践事例を用いて、本学にあった授業計画を検討していく。なお、「(2) 総合的な学習の時間の指導計画の作成」と「(3) 総合的な学習の時間の指導と評価」についての検討は別稿に譲る。

2. 総合的な学習の時間の意義と課題

総合学習は、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習とし、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の探求プロセスを通して、学習活動が展開されることを重視してきた。これによって、児童・生徒の実社会・実生活に役に立つ能力（例えば、情報活用能力、表現力、課題解決能力など）、複雑で変化の激しい社会の中での生きる力などが育成されていく。この

ように、総合学習は積極的な意義を持つ。新学習指導要領「第4章 総合的な学習の時間」では、各学校において定める目標及び内容の取扱いとして、「目標を実現するにふさわしい探究課題及び探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力については、教科等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力が育まれ、活用されるものとなるよう配慮すること」⁽⁸⁾が示されている（下線部は筆者によるものである）。これはこれまでの学習指導要領になく、今回の改訂で新たに提起されているものである。新学習指導要領では、知識・技能の習得を活用・問題解決能力の育成につなげるための「主体的・対話的で深い学び」の重要性が掲げられた。つまり、児童・生徒が自ら生活や地域社会における課題を発見し、探究的な活動を通して問題を解決しようとする総合学習を通して、「全ての学習の基盤となる資質・能力」の育成につながるという期待から、総合学習の重要性と意義が強調されたといえよう。

新学習指導要領では、高校の総合学習を「総合的な探究の時間」という。高校の場合、さらに以下のことが総合的な探究の時間の意義⁽⁹⁾として述べられている。まず、高校生の場合、思春期特有の状況から脱し、大人社会での課題と出会う時期でもある。進路や、就職など、自分の将来を考え、社会の中で生きて働く力を身につけることが期待される。次に、高校生が自信を持ちながら実社会へ出て行くために、自己肯定感、社会への参画意識、責任感、自己と他者、社会との関係への意識などを有することが必要とされる。こういった資質・能力を高校生の発達状況に沿って育成していくことが学校教育に求められる。「自然や社会との深いつながりや質・量ともに豊かな体験を意図的、計画的、組織的に提供し、そこで出会う教育的に価値ある諸課題の探究に、各教科・科目等で学んだ知識や技能をも活用しながら、主体的、創造的、協働的に取り組む機会を得られる」⁽¹⁰⁾ことを特質とする総合的な探究の時間は、生徒の資質・能力の育成には極めて重要な役割を果たすことになる。

このような意義を持つ総合学習は、一方で課題も伴う。筆者はかつて総合学習が誕生してからの諸課題について考察を行い、①平成15年の段階では導入

初期における分かりにくさゆえの課題（テーマ設定、取り組み内容の選定の困難）があったこと、②目標の不明確さという課題は存在し続けていること、③第2の点と関連して、総合学習と教科等とのつながりの担保という実践的課題があること、④学校間の接続について十分に検討されていないこと、という4点を指摘した⁽¹¹⁾。

新学習指導要領では、さらに以下のように、総合学習の未解決課題及び新たな課題⁽¹²⁾を示している。

・総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにすることについては学校により差がある。これまで以上に総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすることが求められている。

・探究のプロセスの中でも「整理・分析」、「まとめ・表現」に対する取組が十分ではないという課題がある。探究のプロセスを通じた一人一人の資質・能力の向上をより一層意識することが求められる。

以上のことから、今後「総合的な学習の時間の指導法」においては、履修学生に以上に述べた総合学習の重要性と意義を理解させることと同時に、総合学習の抱えている課題も意識させることが必要である。履修学生が意義と課題の双方を把握することで、学校現場において総合学習を計画・指導する際、探究的な学習の過程を一層重視することや、各教科等で育成する資質・能力を関連付けること、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を明示することなどを検討することが可能となろう。

3. 総合学習の目標と内容

(1) 総合学習の目標の設定

本学の場合、高校教諭一種免許状（公民）と中学校・高校教諭一種免許状（英語）を取得することが可能である。以下、中学校と高校を中心に学習指導要領における総合学習の目標を検討する。

表2⁽¹³⁾のように、現行学習指導要領と新学習指導要領においては、横断的・総合的な学習等を組織し、生徒の主体的な学習活動を通して、諸問題を解決するための資質・能力を育成するという、総合学習の趣旨は大きく変更されていないことがわかる。一方、新学習指導要領の目標の特徴としては、総合学習が目指している具体的な資質・能力の育成がより明示されている点である。

新学習指導要領の「第2 教育課程の編成」においては、総合学習と学校教育目標との関係、また教育課程での位置付けについて以下のように示されている⁽¹⁴⁾。

1 各学校の教育目標と教育課程の編成

教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第4章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。

2 教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

(1) 各学校においては、生徒の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。

(2) 各学校においては、生徒や学校、地域の実態及び生徒の発達の段階を考慮し、

表2 平成21年・平成22年と平成29年・平成30年の総合学習の目標

	平成20年・平成21年 総合学習の目標	平成29年・平成30年 総合学習の目標
中学校	<p>横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。</p>	<p>探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>
高校	<p>横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。</p>	<p>探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。</p>

豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。

ここでは、「各学校の教育目標を明確にするとともに」、「総合的な学習の時間の第2の1に基づき定める目標との関連を図るものとする」と記されたように、総合学習の目標と学校教育目標との関連性を持たせることが示され、また、「教科等横断的な視点から教育課程の編成を図る」と示されているように、各学校の教育課程の編成において、総合学習は重要な位置にあることが強調されているといえる。各学校は上記のような総合学習の目標の作成にあたり、学校教育目標及び生徒像、他教科等との関連性の確認の上、総合学習を通して、どのような生徒を育てたいか、どのような資質・能力を育てようとするのかを明確しなければならない。この際、考慮すべき点として、以下のように示している⁽¹⁵⁾。

- ・ 生徒の実態
- ・ 地域の実態
- ・ 学校の実態
- ・ 生徒の成長に寄せる保護者の願い
- ・ 生徒の成長に寄せる地域の願い
- ・ 生徒の成長に寄せる教職員の願い

実際、各学校の教育目標や育てたい生徒像の中には上記のものが含まれていることが多いと考えられる。新学習指導要領においては、学校教育目標や生徒像などを踏まえたうえで、総合学習の目標を設定することがより強調されているといえる。

(2) 総合学習の探究課題の設定及び事例の検討

上記のような総合学習の目標を実現するために、各学校が適切な探究課題を設定しなければならない。新学習指導要領では、以下のような探究課題例が示されている。

表3 総合学習の探究課題

探究課題	探究例
現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題	<ul style="list-style-type: none"> ・国際理解：地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観 ・情報：情報化の進展とそれに伴う日常生活や消費行動の変化 ・環境：地域の自然環境とそこに起きている環境問題 ・福祉：身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々 ・健康：毎日の健康な生活とストレスのある社会 ・資源エネルギー：自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題 ・安全：安心・安全な町づくりへの地域の取組と支援する人々 ・食：食をめぐる問題とそれに関わる地域の農業や生産者 ・科学技術：科学技術の進歩と自分たちの暮らしの変化 など
地域や学校の特色に応じた課題	<ul style="list-style-type: none"> ・町づくり：町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織 ・伝統文化：地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々 ・地域経済：商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会 ・防災：防災のための安全な町づくりとその取組 など
生徒の興味・関心に基づく課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ものづくり：ものづくりの面白さや工夫と生活の発展 ・生命：生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ など
職業や自己の将来に関する課題	<ul style="list-style-type: none"> ・職業：職業の選択と社会への貢献 ・勤労：働くことの意味や働く人の夢や願い など

表3⁽¹⁶⁾で提示された探究課題例は、各学校が各自の教育目標と生徒像に合わせ、総合学習の探究課題を設定する際に参考になるものと考えられる。

上記のことを踏まえて、以下、筆者がかつて調査を行ったA中学校の事例⁽¹⁷⁾

を用いて、学校教育目標と生徒像との関連性を検討し、総合学習の目標、探究課題の設定の実際について述べていく。

表4 A校の教育理念・目標・方針・目指す生徒像及び総合学習の目標

教育理念	人生はいつも新しき挑戦の連続 そして <u>未見の我の発見</u> の旅
教育目標	○知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する。 ○個性や能力に基づいた進路希望を実現する。
教育方針	○教育活動全体を通じて、良き市民たるにふさわしい社会性を育てるとともに、 <u>豊富な体験型学習により、個性豊かな人間性の涵養に努める。</u> ○基礎的な学力を習得させるとともに、 <u>思考力・判断力・表現力・発表力を含めた確かな学力を培う。</u> その成果に立って、進むべき道を自ら自由に選択・決定する。
目指す生徒像	○志を高く持ち、意欲をもって学習に取り組む生徒。 ○優しさと思いやりの心をもって、積極的に行動する生徒。 ○自らに厳しく、責任感をもって、たくましく活動する生徒。
総合学習の目標	さまざまな体験学習をより効果的なものにするために、事前の調べ学習や事後のレポート作成などに取り組みます。体験・学習発表の準備や、校長面接のための自己分析・エントリーシート作成などの時間にも使います。机の上の時間にも使います。机の上の学習だけでは得られない体験を通じて、 <u>想像力・思考力・表現力を育みながら、「未見の我」の発見に努めます。</u>

※下線部は筆者によるものである。

A中学校の場合、教育理念に基づき、教育目標、方針及び目指す生徒像が作られ、表4のように、総合学習の目標の中からも、「想像力・思考力・表現力」の育成や「『未見の我』の発見」といった教育理念・目標・方針などで示されている内容が見られる。

また、上記の目指す生徒像の追求、教育目標の実現のため、教育方針で示す通り、A校は「豊富な体験型学習」と「基礎的な学力…思考力・判断力・表現

力・発表力を含めた確かな学力」の育成を両立する教育課程を編成している。このうち、「体験型学習」は教科横断的視点で組み立てた総合学習という位置づけである。総合学習の目標の実現のため、A校は多様な体験型学習の内容を設けている。

表5 A校の総合学習の探究課題と内容

学習指導要領で示された探究課題例	A校探究課題	内容
生徒の興味・関心に基づく課題 ・生命：生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ	命の尊さを学び合う AED講習会	心肺蘇生教室(1年) 心肺蘇生教室のための事前講習(2年)
現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題 ・環境：地域の自然環境とそこに起きている環境問題 ・国際理解：地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観 地域や学校の特色に応じた課題 ・伝統文化：地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々	友との絆を深める宿泊研修	自然体験教室(1年) 古都探訪教室(2年) 海外体験教室(3年)
現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題 ・健康：毎日の健康な生活とストレスのある社会 地域や学校の特色に応じた課題 ・町づくり：町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織 ・伝統文化：地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々 ・地域経済：商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会	心身の鍛錬、自然と歴史に触れる 〇ウィーク	〇〇連山登山<15km>(1年) ぐるっと〇〇湾～昔と現在～<20km>(2年) 〇〇街道ウィーク<25km>(3年)
職業や自己の将来に関する課題 ・職業：職業の選択と社会への貢献 ・勤労：働くことの意味や働く人の夢や願い	未見の我を発見する キャリアガイダンス	大学体験教室(1年) 職業体験教室(2年) 高校体験教室(3年)

※A校の所在地と関連する地名等は「〇〇」で表示。

表5⁽¹⁸⁾のように、A校は多様な「体験型学習」（総合学習）の探究課題を設けており、それぞれは学習指導要領で示された探究課題例にも対応している。

また、上記の探究課題の内容を見ると、学校の教育目標である「知・徳・体の調和」を目指しつつ、地域の実態、生徒の進路・将来を意識していることがわかる。

さらに、A校の副校長に対するインタビューによれば、総合学習を通した生徒の資質・能力の育成について、学年（生徒の発達段階）を考えながら、道德、特別活動、各教科との連携を行っている。

例えば、生徒の生きる力の育成のために行っている1年生・2年生対象の「心肺蘇生教室」は、命の大切さの理解、思いやりの心の育成につながり、道德教育の意味を持つものともなっている。

「古都探訪教室」の場合は、2年生が2泊3日で京都・奈良に行く際、特に2日目・3日目の京都は1日半の行程を生徒自身に作らせる。また、社会科の授業で生徒の興味を持ったところを調べてもらうという。さらに、調べた内容はA3紙にまとめ、文化発表会の時に展示する。

また、「ぐるっと〇〇海湾～昔と現在～（20km）」は、山登りしたり町歩きしたりという遠足ではあるが、それだけではなく、町の由来や歴史について調べ学習を生徒にさせ、社会科の授業での事前事後学習や国語の授業での俳句作り、美術の授業で模型作り、文化祭での展示などをさせているという⁽¹⁹⁾。

以上のことから、今後「総合的な学習の時間の指導法」においては、まず、学習指導要領で示されている総合学習の目標、内容の設定時の留意点、指導ポイントを履修学生に伝えていかなければならない。教授・指導する際に、理論的知識だけではなく、探究課題の設定の多様な具体例を履修学生に紹介することも大事であるとする。特に教職課程教員が自ら調査・収集した事例を紹介することで、履修学生に総合学習の目標、教育課程の編成との関係をよりリアルに理解させることができ、そして探究課題の設定の実際を動的に感じさせることができると考える。

このうえで、履修学生に総合学習の探究プロセス（「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」）に沿って実践を行ってもらおう。演習課題として、例えば、母校（中学校、高校）の教育目標、生徒像を調べてもらい（①②）、母校の特徴や地域の実態（②③）に合わせて、履修学生自身に母校にあった総合学習の探究課題を設定してもらおう（③）。探究課題設定時、学習指導要領で提示された探究課題例への対応や、生徒・学校・地域の特性を踏まえること、履修学生自身の担当教科や、ほかの教科、特別活動などとの連携、教科横断的な学習の視点を持つことなどについて適切に教授・指導することが教職課程の教員に求められる。履修学生が母校の総合学習の探究課題を設定したあと、「やって終わり」の演習にならないように、履修学生に探究課題設定の考え方などを発表してもらい、グループ等で議論をしてもらおう（③④）。さらに、こういった発表・議論を通して得た知見・感じた課題をまとめてもらおう（③④）。これは履修学生の探究課題の設定という実践で得た資質・能力を定着させるため、今後の総合学習の実践につなげるためのものであると考える。このために、プレゼンテーションやグループディスカッションなどの表現の方法や、ポートフォリオの作り方やレポートの効果的な蓄積の方法といったまとめの方法を、履修学生に教授・指導する必要があるだろう。

おわりに

本稿は総合学習のコアカリキュラムで示されている目標に沿って、学習指導要領、先行研究及び総合学習の事例を検討し、本学の新設科目である「総合的な学習の時間の指導法」において、履修学生に何を、どのように総合学習の理論的知識等を理解させ、そしてどのような教授・指導を通して総合学習の実践の力を身につけさせるかについて論じた。しかし、これはあくまで計画段階であり、今後本稿で提示した内容・指導方法に沿って、実際の授業等を通して、課題と改善点を明らかにしていく必要がある。また、本稿は、「総合的な学習

の時間の指導法」のコアカリキュラム「(1) 総合的な学習の時間の意義と原理」を中心に検討したものである。「(2) 総合的な学習の時間の指導計画の作成」と「(3) 総合的な学習の時間の指導と評価」についても、「総合的な学習の時間の指導法」の必要不可欠な項目であり、これらの項目に沿って学習指導要領及び先行研究の検討を行い、総合学習の事例の収集・提示などを通して、「総合的な学習の時間の指導法」のあり方を全面的にデザインしていくことを今後の課題とする。

註

- (1) なお、本学において新設された正式な科目名は「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」である。このうち、「特別活動指導法」という部分は本学教職課程において従来からある科目であり、今回の検討の対象外とする。
- (2) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終アクセス日：2019年6月5日）。
- (3) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』2017年、pp. 20-21。なお、小学校学習指導要領と高校学習指導要領にも同様の記述がある。
- (4) 楊川「教職課程科目における総合的な学習の時間の指導方法に関する研究－カリキュラム・マネジメントの視点から－」九州国際大学教養学会『教養研究』第23巻第3号、2017年、pp. 65-85。
- (5) 楊川「総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・マネジメントに関する研究－学習指導要領の検討および事例分析を通して－」九州国際大学教養学会『教養研究』第24巻第2号、2017年、pp. 35-53。
- (6) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会『教職課程コアカリキュラム』2017年、p. 2。
- (7) 同上資料、p. 20。
- (8) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』2017年、p. 160。
- (9) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』2018年、pp. 71-72。
- (10) 同上書、p. 72。

- (11) 前掲論文(4)、pp. 75-78。
- (12) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』2017年、p. 6。
- (13) 文部科学省『中学校学習指導要領』2008年、『高等学校学習指導要領』2009年、『中学校学習指導要領（平成29年告示）』2017年、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』2018年を参照し、筆者が作成したものである。
- (14) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）』2017年、pp. 20-21。
- (15) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』2017年、p. 68。
- (16) 同上書、pp. 70-72を参照し、筆者が作成したものである。
- (17) 調査の概要と具体的な内容について、前掲論文(5)、pp. 35-53を参照されたい。
本稿は学校教育目標、生徒像と総合学習の目標、探究課題の設定との関係性を具体的に描くために、上記の事例を再分析したものである。
- (18) 『A校 SCHOOL GUIDE 2018』を参照し、筆者が作成したものであるが、A校のすべての「体験型学習」から一部の典型例だけまとめたものである。
- (19) 具体的には、前掲論文(5)、pp. 43-45を参照されたい。

参考文献

- ・田村学編著『平成29年改訂 中学校教育課程実践講座 総合的な学習の時間』ぎょうせい、2017年。
- ・森田真樹・篠原正典編著『新しい教職教育講座 教職教育編 8 総合的な学習の時間』ミネルヴァ書房、2018年。

